

かわさきの新たなランドマーク

川崎市内を一望できる展望ロビー・スカイデッキを公開



新庁舎は、震災対応にも優れ、大規模災害時にも市民への情報発信、生活再建・復興の中枢拠点として役割を担います。



北東方面には、六郷河川敷や新宿に東京都庁、羽田空港の航空機離発着、東京タワーやスカイツリーなどが一望できます。



南東方向には、横浜ランドマークタワーやベイブリッジ、つばさ橋、また天気の良い日には富士山を一望することができます。

1938年に竣工した川崎市庁舎は、75年の歴史に幕を閉じ、新たに地上25階、地下2階、高さ約117mの新庁舎が誕生。

新庁舎25階には、地上110mの高さから市内を一望できる『展望ロビー・スカイデッキ』が設置され、市内は勿論、東京都内、羽田空港やスカイツリー、横浜ベイブリッジから富士山に至るまで眺望が楽しめます。どなたでも利用でき、入場無料。

【展望ロビー公開時間】

午前9時～午後9時まで
(土日祝日含む)

※設備点検や悪天候時には展望フロアを閉鎖することがあります。

市民代表の議員が熱い議論を展開する議場



議員席後方の傍聴席は、100名が議会の進行を見ることができます。また、親子席が設けられ、小さいお子さんと一緒に安心して議会をご覧いただけます。



議場内「演壇」からの風景。代表質問や討論などおこなう時に使用されます。議場や委員会室では、市民生活に直結する様々な課題を活発に議論されています。

新庁舎23階・24階部分にある市議会議場は、各区選出の議員 60人が市民の代表として、活発に論戦が繰り広げられています。

新議場では、新たに採決における押しボタン方式を採用し、大型スクリーンに各議員の賛否が色分けして表示されるなど、採決態度が鮮明になりました。

傍聴の流れ【動画】



「議会かわさき」広報キャラクターのおよんが川崎市議会の傍聴の流れをご紹介します。

議会中継



開催中の会議および過去の会議をご覧になれます。

会議録検索システム



川崎市議会の本会議・委員会等の全発言を対象に言葉で検索できます。

発行者 川崎市川崎区宮本町1 川崎市議会議員 飯田満

川崎市議会報告



ぜいじのみかた

2026年 vol.7



特集 旭川市ICTパーク事業及び旭川市役所の書かない窓口、次世代窓口「旭川モデル」の取り組みを訪問調査

川崎市議会議員
環境委員会 委員

みつる
飯田 満



Profile

旭川市ICTパーク事業及び旭川市役所の書かない窓口、次世代窓口「旭川モデル」の取り組みを訪問調査

7月7日、8日に旭川市を訪問し、ICT関連の交流と人材育成、ビジネス創出を目的とした拠点施設、ICTパークにおいて事業概要説明を受け、翌日に、市役所の総合窓口整備の一環として、「次世代窓口『旭川モデル』」の構築において、国が示す「書かない・待たない・回らない窓口」に対応する仕組みの概要説明と導入現場を視察した。

eスポーツによるデジタル人材育成と産業振興・中心市街地の活性化

旭川市のICTパークは、令和3年2月に旭川市中心市街地に整備され、ICT関連企業等の交流と若者などの人材育成、ビジネスモデルの創出、企業誘致などを目的とした拠点施設で、市の産業振興、中心市街地活性化、デジタル人材育成を一体的に進める「場」として位置づけられている。

視察における事業概要説明では、eスポーツや

■目的と位置づけ

ICTパーク事業は、旭川市のICT推進プランや地方創生の枠組みの中で、次のような役割を担っているという。①eスポーツやゲームを入口にしたデジタル人材の育成。②起業家や事業者、学生、クリエイターの交流拠点。③中心市街地の集客とナイトタイムも含めた賑わいづくり。④企業誘致やワーケーション受入れの「見せる場」としての機能を役割として。また、企業版ふるさと納税を活用した地方創生プロジェクトとしても位置づけられており、民間資金も取り込みながら継続的な運営をめざしている点が特徴となっている。

■今後の展望と川崎市での取り組み

最新の旭川市の市政方針や都市計画では、中心市街地再整備やナイトタイムエコノミーの強化、ワーケーションの推進などに力を入れていることが読み取れ、その中核の一つとしてICTパークを位置づけている。若者のデジタル人材の育成は勿論、民間企業とのタイアップによって、新しいビジネスの創出が期待できる。

一方、川崎市においても全国的な出生数の減少による影響から人口減少は将来的に避けられない。若者の教育活動の一環として、eスポーツの部活動におけるデジタル人材の育成、部活動の多様化に

ゲーム制作、プログラミングなどを切り口に、ジュニア世代を含む幅広い世代のデジタル人材育成と賑わい創出による地域経済活性化を図る事業として整理されている。

■事業成果と課題

約2,200万円余の運営コストに1,800万円の固定事業費の財政バランスに、今後の設備機器の更新や施設整備についても将来的に財政支出が見込まれることから事業の継続性に努力と工夫が必要とされている。

外部監査では、ICTパークの運営費の位置づけや効果検証に必要性も指摘され、今後は「賑わい創出」や「デジタル人材育成」はどの程度数値として成果に繋がっているかを、より具体的に示すことが課題とされている。

繋げていくことによって成果が見込まれる。



ゲームソフト等充実したパーク



映画館を改装したICTパーク

行政窓口の混雑化・待ち時間解消に「書かない窓口」の採用と効果

旭川市は、新庁舎整備とあわせて、庁舎1階に総合窓口を集約し「市民が迷わずに、長時間待たずに安心して目的を果たせる窓口」を目標に総合窓口化を進めてきた。その延長として、デジタル技術を活用

し窓口手続きを抜本的に変える次世代窓口「旭川モデル」の構築業務委託を公募型プロポーザルで実施してきた

■旭川モデルの位置づけ

旭川市次世代窓口「旭川モデル」構築業務委託共通仕様書で旭川モデルの基本思想や全体像が示されている。

国のモデル事業分と市独自分を合わせて構築していく想定で、個別仕様書を別途整備している。



1階に各窓口を案内する自動受付機が設置

■旭川モデルの主な特徴

旭川市は既に転入・転出・転居などの移動届で、事前オンライン入力により窓口での氏名・住所等の記入を不要とする「書かない窓口」を開始している。次世代窓口「旭川モデル」では、こうした事前入力に加え、窓口側システムでの聞き取り入力に加え、複数手続きを束ねて処理する仕組みなど、窓口業務全体を再設計する方向性が仕様書で示されている。

旭川市では「次世代総合窓口グランドデザイン」を別途策定しており、フロアのレイアウト、案内導線、待ち時間短縮の考え方などを一体で整理している。また、スマートフォンから事前に受付番号を発券できる「Web発券」を導入し、窓口の混雑状況配信をおこなっている。これにより、市民は自分の呼び出し番号や混雑状況を確認し、来庁タイミングを調整できるなど工夫がされている。

■今後の展望と川崎市での取り組み

「書かない窓口」により、申請書の手続き負担が軽減され、高齢者でも職員との対話を通じて手続きが簡素化して進められる点が評価でき、新庁舎の空間デザインとDXが連動しており、案内表示や導線設計も含めて「迷わない」「心理的な負担が少ない」など、窓口づくりが進んでいる。

川崎市中原区では、転入転出の多い繁忙期は、4時間を超える待ち時間で市民への多様な負担が現実的に起きている。こうした「旭川モデル」を参考に川崎市内区役所や支所・出張所など、「書かない窓口」やDXとの連動で市民負担を軽減できる可能性を探っていきたい。



実際に書かない窓口をデモンストレーションで体験